平成１３年度認定　（No.22）

農業名人（竹細工名人）

まきの　あきら
牧野　晃
昭和7年生まれ
高遠町勝間在住

都会の子どもも、自分でつくる喜びを覚えて欲しい

家に竹やぶがあり、竹細工は、中学１年からやった。親父（広さん）から手ほどきを受けたというより、独学で作った。竹細工が性に合っていた。もののない時代であり、ビク・ザル・ゲタ等、自分で使うものは自分で作った。その他に、家で使う、背負いカゴやボテ、一斗箕なども作った。親に褒められるのがうれしかった。

勝間地区には水田のふれあい農園があり、高遠町と友好提携している新宿区からは、ここ10年ほど田植えツアーにやってくる。田植えに使うビクを毎年４０～５０個作っている。田植えの後ビクは参加者が土産に持ち帰る。竹細工を完成品にしておくと、人が来て「いいのあるね」、「じゃあ持っていけば」となる。いろいろ世話になって生きているので、欲しい人にはあげる。もっとも最近は、つくりかけで置いておくことも覚えた。

旅行会社が企画するツアーの千葉市の中学生にも竹細工を教えた。アルミ缶を芯にして一輪挿しをつくる。竹を割ることからやればいいが、体験学習の時間が限られるので、編むところだけ子どもにやってもらっている。将来は、竹を切り出すところから体験して欲しい。今の子どもたちは、刃物の使い方を知らない。「自分たちの小さい頃は、誰もが刃物を持っていた。ただし護身ではない。人を傷つけるのは最低だ。」「手を絶対切らない方法を教えよう。刃物を体にあてないことだ。」そんな話しをしながら刃物の使い方を教える。子どもと交流するのも楽しい。竹細工の後、時間があれば竹トンボを削らせる。中学生はうんと喜ぶ。

都会の子どもも自分でつくる喜びを覚えて欲しい。最初面白くなさそうにしていても、だんだん一生懸命になる。千葉からきた子は「うんと楽しい人がいるから、行け」と先輩に言われて来たという。孫の令奈さんにも、「どんなことでも、ちょっと人よりできると自信がつくからな」と励まして、竹細工を教えている。

今後は、高遠共同作業所さくらの家で、木工細工の応援をしたい。竹の節を活用したやじろべえや白樺の枝にストラップをつけて土産品にするなど商品化のアイデアがある。作業所のメンバーの、作る喜びや、販売したものが小額でもまるまる自分たちの手につくお手伝いをしたいと思っている。